

第 分科会(小中合同学校行事部会)

活動をつくりあげる喜びを実感し、ともに協力し 信頼し合える人間関係を形成する学校行事

1. 研究内容

- (1) 児童・生徒が主体的に活動をつくりあげる学校行事はどうあるとよいか。
- (2) 望ましい人間関係を形成する力を高める学校行事はどうあるとよいか。

2. 提言の要旨

提言1

つながりを重視し、達成感や所属感を子どもたちに味わわせる学校行事の取組

函館市立北美原小学校 佐藤 充

提言内容

行事をやり終えたときの達成感、充実感、所属感を味わわせるために、学校行事を構築する際に3つの重点を置くことで子どもたちに達成感を味わわせるようにした。

1. つながりを重視した

年間指導計画の作成

行事を通して身に付けさせることやこれまでの行事で育てた力をどう高めていくのかを考えて年間指導計画の作成と教師の共通理解を図っていった。年間指導計画を作成する際には、学期ごとの目標を明らかにすることで、各行事のつながりを意識することができた。また、教職員間の共通理解を図ることができ、子どもたちに一貫した指導ができる。見通しをもった計画があることで、行事に向けた学級活動の時間を設定することができ、子どもたちの行事に向けた意識付けをより明確にしたり継続したりすることが期待できる。

2. 各学期に核となる行事を位置付ける

一学期は運動会、二学期は学芸会、3学期は6年生を送る会(卒業式)とし、目標の設定と反省を通して自分自身と仲間の成長を確かめ合った。行事に向かう際に個々に目標をもたせ、自分自身の取組の過程を振り返らせる。また、集団の成長を感じられるように仲間の頑張りに

目を向けさせていくことで積み上げを意識させ、次のステップを意識させた。

3. 活動を創り上げる時数の確保

年間指導計画を基にして、中・短期の指導計画を立て、準備活動の時間を生み出す工夫を行った。見通しをもつことで生まれる余裕を核となる行事の準備に時間とし、子どもの意欲を継続できるような工夫をした。

<提言2

生徒の役割を明確にした

学校行事の取組

増毛町立増毛中学校 佐藤 美智子

提言内容

「社会性や自主性を育む特別活動の充実」を目指し、生徒が主体的に活動できる行事となるように計画した。その際、生徒にゆだねる部分と教師が担うべき部分を明確にしていった。決められた範囲の中で活動することで生徒は安心して活動することができる。

日常の活動の中心となる生徒会や常任委員会では、主体的に活動する上級生、憧れをもって共に活動する下級生の姿を目指した。活動の目的が明確になり、目標をレベルアップさせていくことで、活動の質が高まっていく。こうした日頃からの異学年の交流を大切にしていくことで、相互理解が深まる。行事では、こうした活動で積み上げてきた姿が見られ、学年の枠を超えた協力の姿が見られた。体育祭、学校祭では、自ら進んで取り組む姿や仲間のために取り組む姿が見られた。そのような姿が、下級生たちには、これから目指すべきものとして捉えることができていた。

主体的な活動にするための準備・支援を行うのが教師の役割。今まではこうだったからではなく、実態と目指す姿を明確にして行事に取り組む必要がある。

3. 研究討議

討議の柱1

児童・生徒が主体的に活動をつくり上げる学校行事はどうあるとよいか。

子どもが主体的につくりあげていく行事とするためには、どんな子どもたちに育てていきたいのか明確な目的をもって年間の指導計画を立てていく必要がある。その中で各行事における目標や中・短期的な計画を立てることで、見通しをもった活動にすることができる。また、「何を目指していくのか」を教師間はもちろん子どもたちにも共通理解を図ることで、行事の質が上がる。小中合同で行われる部会であることを考えると、小学校でどのような経験をしてどのような積み上げがなされているのかを基に中学校での特別活動につなげていくといった系統的な取組について考えていくことが必要である。また、中学校でどのような力を必要としているのか考えることで、9年間を見通した取組にすることができる。

PDCA のサイクルで行事に取り組み、その過程で子どもたちに評価を返したり、子ども同士で評価をし合ったりすることで、子どもたちの意欲につなげることができ、主体的な活動作りにつながる。

討議の柱2

望ましい人間関係を形成する力を高める学校行事はどうあるとよいか。

行事は異学年が関わる意図的な場とする必要がある。教師が主体的な場となるように計画をし、その中で上級生が自覚をもって活動をする。そうすることで、下級生が憧れをもち、次への意欲をもたつことができる。自覚と憧れが人間関係形成力を高めることにつながる。そのためには、子どもたちに憧れの対象となる姿を見せる手立てが必要であり、教師が価値付けていくことで、子どもたちの目指す姿を高めていくことが大切である。

また、行事での異学年交流は、他者理解を深める場と考えることができる。委員会活動や部活動などの日常の関わりを大切にしていくことで、お互いの新たな一面を知ったり、これまで以上に相手を理解できたりする場となるように考えていくことも大切である。

4. 指導助言

行事と行事、行事と日常をつなげていくのが学級活動である。学級活動の在り方を工夫することで、行事の成果を高めていくことができる。生徒会や児童会で取り組んでいることを教職員間みんなで共有し子どもたちに関わっていくことが大切である。

行事は非日常であり、子どもたちにとっては特別なもの。一年間の見通しをもってどんな子どもを育てるのか（目的）とそれに向けて各行事で目指すものは何か（目標）を明確にしていく必要がある。また、確かな成長のために評価基準が必要である。自主的に行うには3つのステップがある。それが「わかる（指導）できる（ゆだねる）する（工夫する）」である。行事で考えると、自覚や憧れ（他者からの目）が「こうしたい！」という欲求を生み「自主的にする」というステップにあげてくれる。

行事の精選が今後の課題として挙げられている。目指す子ども像を明確にして、そこに必要な行事は何か、また、確かな力をつけていけるように計画していかなければならない。よりコンパクトに、でも、必要なものは残してと考えていきたい。

5. 今後の課題

行事を通して考えても、小中の連携の大切さが見えてきた。小学校段階でどこまで育てるのかを考えて交流していくこと。

目指す子どもの姿を明確にして行事の精選と時数の確保を行うこと。